

学位論文要旨

氏名

三浦 雅子



論文題目

「Impact of mothers' parental bonding experience on emotional availability (EA)
with their children」

(母親の被養育体験が子どもとの情緒応答性(EA)に与える影響)

指導教授承認印

生地 新



「Impact of mothers' parental bonding experience on emotional availability (EA)
with their children」

(母親の被養育体験が子どもとの情緒応答性 (EA) に与える影響)

氏名 三浦 雅子

はじめに

「虐待などの不適切な養育により愛着障害や心的外傷を抱えた人は、後年、親になって自分の子どもとの関係に影響を与える」という世代間連鎖については、数多くの研究報告がある (Belsky, Conger & Capaldi, 2009; Cicchetti, Rogosch & Toth, 2006; Egeland, Jacobvitz & Sroufe, 1988; Pears & Capaldi, 2001)。また、多くの研究で、不適切な養育行動の背景要因として、母親の被養育体験が影響していることが明らかになっている (Crowell & Feldman, 1988; Pears et al., 2001)。一方で、被虐待体験があっても自分が母親になることに対して肯定的感情を持っている女性は、子どもとの関係についての問題や養育ストレスをさほど感じることはなく、被虐待体験が直線的に養育行動や親子の関係性に否定的影響を及ぼすとは言えないことを示唆する研究も報告されている (Egeland et al., 1988; Main & Goldwyn, 1984)。児童虐待やネグレクトにつながっていく親-乳幼児関係上の困難の背景には、親側の養育上の知識やスキルの不足があるだけでなく、養育者側の被養育体験に関連する情緒的交流の能力の問題があると考えられている (Cicchetti et al., 2006)。

親自身の被養育体験が自分と子どもとの関係性に影響することを実証するためには、現在の親子の関係性の評価が必要だが、質問紙による評価は客観性という点で弱みがある。客観性のある親子の関係性の評価方法の一つに Emotional Availability Scale (以下 EAS) がある (Emde, 2012)。Emotional Availability (以下 EA) は、主として非言語的な情緒表出を手がかりとして行われる親子双方の情緒的コミュニケーションの能力を意味している。EAS は、EA をビデオ記録で客観的に評価する方法で、親自身の被養育体験が現在の親子の関係性に与える影響を検証する研究において有用なツールとなると考えられる。これまで、母親自身の被養育体験が、その母親の現在の親子の関係性に与える影響を客観的に評価して検証した研究は多くはない。本研究は、子育て中の日本人の母親自身の被養育体験がその母親と子どもとの EA に対してどのような影響を与えているのかを明らかにし、世代間連鎖の研究をさらに発展させることをねらったものである。

方法

対象者は、千葉市の保育園と子育て支援センターそれぞれ1か所でポスターにより募集した。その結果、16名の母親が研究に参加することに文章で同意した。期間は、2019年6月から2020年2月で、以下の手順で調査を実施した。

- (1) 保育施設と子育て支援センターにポスター掲示した。
- (2) 研究参加に同意した対象者と調査の日時を決定した。
- (3) 調査
 - ①ビデオ撮影の実施：EA評価のための記録
 - ②半構造化面接：内容はボイスレコーダーで録音
 - ③質問紙の回答：母親に対して Edinburgh Postnatal Depression Scale（以下 EPDS）を実施
- (4) 調査後、ビデオ記録の EAS を用いた評価を、EAS の基礎的訓練を受けた研究者1名を含む研究者2名で行った。

半構造化面接のインタビュー内容は、対象者が母親からどのように育てられてきたか、母親に対してどのように感じているか、についてである。インタビューは、プライバシーが守られる研究施設内の個室で行った。インタビューによって得られた、対象者の被養育体験に該当するデータの分析は、質的研究法である KJ 法（Kawakita, 1967）に準拠して統合した。

母親とその子どもとの間の EA の評価については、EAS を用いて評価した（Biringen & Easterbrooks, 2012）。EAS の尺度構成は、大人から子どもに向けた EA 4次元、子どもから大人に向けた EA 2次元からなる（Biringen, 2011）。大人は「大人における感受性」「大人の構造化」「大人の侵襲的でないこと」「大人に敵意がないこと」、子どもは「子どもの大人への反応性」と「子どもの大人への関わり合い」である。EA 評価には少なくとも20分間の観察を行うことが推奨されており、本研究では、20～30分の時間で、ビデオ録画した。EA の評価は主として EA の総合的な評価尺度である Clinical Screener の得点を用いた（Biringen, 2008）。90点以上を high EA、60-89点を medium EA とした。また、産後のうつ状態を評価する目的のために用いた EPDS は、日本では産後うつ病の判断基準である区分点を9点以上としており（Okano et al., 1996）、これに準じた。

結果

KJ 法によって抽出された母親の被養育体験についての語りのシンボルマークは【stable parenting】【ambivalent parenting】【unstable parenting】であった。【stable parenting】は、《完璧を求めない子育て》《母への思い》、【ambivalent parenting】は、《複雑な母への思い》《母という役割以外の母の存在》、【unstable parenting】は、《完璧を求める母》《母への気遣い》《厳しい養育への不信感》のカテゴリーから構成されていた。母親の被養育体験と EAS との関連性は、【stable parenting】 high EA が5組、【stable parenting】 medium EA は0組、【ambivalent parenting】 high EA は3組、【ambivalent parenting】 medium EA は1組であった。さらに、【unstable parenting】 high EA は3組、【unstable parenting】 medium EA は4

組であった。母親の被養育体験が【stable parenting】の場合、母親と子どもとの間の EA は大部分で肯定的な関係として評価できた。母親の被養育体験が【ambivalent parenting】の場合も多くの母子の EA は安定していたが、medium EA のケースは、母親がやや回避的な行動を見せる場面があった。母親の被養育体験が【unstable parenting】の medium EA ケースは子どもへの語りかけが少なく子どもの遊びを遮る場面もあった。EPDS については、明らかなたつ状態を疑わせるケースはいなかった。

考察

先行研究では、AAI による成人の愛着表象を、autonomous、dismissing or disoriented、preoccupied、unresolved を含めて 4 類型に分類している (Main & Kaplan, 1985)。本研究の【stable parenting】は autonomous、【ambivalent parenting】は dismissing or disoriented、preoccupied、【unstable parenting】は unresolved に該当すると考えられた。被養育体験が【stable parenting】の母親と子どもの EA が全般的に安定していたという結果は、自律・安定型の母親と子どもの相互作用において positive な傾向が高いとする AAI を用いた研究 (Fonagy, Steele, & Steele, 1991) と一致した結果となった。また、被養育体験が【ambivalent parenting】の母親と子どもとの EA も多くの場合、安定したものになる可能性が示唆された。一方で、母親の被養育体験が【ambivalent parenting】で medium EA のケースも存在しており、母親が被養育体験を【ambivalent parenting】に捉えている場合は、母親の回避性や子どもの攻撃性など子育て中の問題につながる可能性も示唆された。母親の被養育体験が【unstable parenting】である場合の母親の回避性や侵入性については、数井らが愛着表象の未解決型の母親の子は、愛着の得点が低い (Kazui et al., 2000) と報告しており、それらに矛盾していない。ただ、母親が【unstable parenting】な被養育体験を有する場合でも、安定した養育行動や EA を有しているケースも存在していた。この結果は、Egeland らの結果 (Egeland, Jacobvitz, & Sroufe 1988) を支持したといえる。この点については、母親の被養育体験が【unstable parenting】で、母親からの否定的影響があったとしても、母親以外のあたたかな存在と新たな関係性をもつことができていることが推察される。結果として、自分の子どもとの関係においても適切な EA を示すことができるのかもしれないことが推測された。

先行研究 (Biringe, 2000) において、世代間連鎖と EA の関連が報告されているように、本研究においても、被養育体験が安定していると、EA が高くなることが示され、母親の被養育体験により現在の子どもとの親子関係に影響するという傾向が示唆された。

研究の限界

本研究は、サンプルサイズが小さく、1 施設だけのデータであるという限界がある。今後、サンプル数を増やし、縦断的な研究を行う必要がある。